



Title	横光の鷗外翻訳作品等の利用について
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	阪大近代文学研究. 2011, 9, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92671
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

横光の鷗外翻訳作品等の利用について

出原 隆俊

横光利一の「蠅」(『文藝春秋』大正十二年五月一日)の冒頭は誰でも知っている、とまで言えるほどであろう。

真夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の巣にひつかゝると、後肢で網を跳ねつゝ暫くぶらゝくと揺れてゐた。と、豆のやうにぼたりと落ちた。さうして、馬糞の重みに斜めに突き立つてゐる糞の端から、裸体にされた馬の背中まで這ひ上つた。

この蠅の様子の記述が映画のカメラを想起させるということとも周知のことである。それとともに、「真夏の宿場は空虚であつた。」という短い一文で言い切る冒頭も印象的である。ところが、これに類似した表現が、鷗外の翻訳作品に次のように見られる。

停車場の広場は空虚である。

「墮落」(リルケ、『諸国物語』所収)である。これより前の箇所にも「寺院は全く空虚である」とあり、(空虚)という言葉の繰り返しは、目を引きやすい。これが偶然なのかどうか(空虚)という言葉は「無礼な街」(『新潮』大正十三年九月一日)でも「露地裏は空虚だつた」とあり、横光の使い癖のようにも思われる。さらに次の箇所も見落とせない。二人の目は意味もなく前の方を見てゐる。その視線は丁度ベンチの木理の上を這つてゐる一疋の蠅の跡を追つてゐるのである。

これらは、二つの作品の関連を強く予想させよう。

それでは、「蠅」の展開を押さえよう。

馭者の登場↓息子に死にそうだと聞いて慌てて駆けつける農婦↓荷物を持つて宿場へ逃げて来て出発を待つ娘と若者↓宿場に来て馬に関心を示す母親と幼い息子↓仲買で儲けた金を大事に抱えて宿場に来た田舎紳士↓出発しないことにいら立つ農婦↓蒸しあがる饅頭を待つ馭者↓

乗り込む乗客は知己のようになる・車体に止まる蠅↓餓頭を食べた馭者の居眠り↓車体の幅を考慮できない馬↓車輪が道から外れ崖下に墜落する車体と飛び上がる蠅

一方、「墜落」は次のようである。

寺院は全く空虚である↓手を握り合つた青年と娘が、ベンチに座つて寺院の戸が閉まるのを待つている↓目で一匹の蠅の跡を追う↓二人とも家族とのわずらわしいやり取りがあり、そこから逃げたいという↓家にいったん戻つてから娘を重荷に思うようになりながらも、青年は約束の停車場に行く↓停車場の広場は空虚である↓娘が来ないので青年は気楽な気分になる↓娘の姿が見えた時青年は街へと逃げ出した

両作品で共通しているのは、「空虚」という言葉の他には、墜落ちをしようとする若い男女と停車場（宿場）という場、そして「一匹の蠅」の存在だけである。蠅は横光作品では冒頭から末尾まで展開の中軸に来るものであり、「墜落」では、これだけで姿を消す。墜落ちについては、「蠅」は、そこに至る事情はいささかも語られていないが、「墜落」では恋仲になつたことを親に叱責されたという娘の事情が記されている、という違いがある。「墜落」には、「蠅」のように乗り合わせるほかの乗客はいない。「蠅」では、墜落ちする男女の他に、母子以外の他の乗客については馬車に乗ろうとする事情が語られている。しかし、そのような違いがあつても、「蠅」

が「墜落」を撰取していることは疑えまい。横光は依拠した作品には語られていた事情はかえつて切り捨て、その代りに、「墜落」ではほんのわずかに姿を見せただけの「一匹の蠅」の存在を拡大する。冒頭で命拾いする光景が描かれ、最終場面では落下する馬や馬車や人間を見下ろしながら飛び去るという作品全体の成立に関わる存在に変更するのである。

眼の大きな一匹の蠅は：車体の屋根の上にとまり直ると、（略）馬車は崖の頂上へさしかつた。馬は前方に現れた眼匿しの中の路に従つて柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考へることは出来なかつた。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車体に引かれて突き立つた。瞬間、蠅は飛び上つた。と、車体と一緒に崖の下へ墜落して行く放埒な馬の腹が眼についた。

いわば、「蠅」はヒントを得た作品の主人公と脇役を転倒させたわけである。人間と小動物の役割を入れ替える、ここに横光の独創の一端があるように見える。しかし、「墜落」の利用だけで、他がすべて横光の発想かという、必ずしもそうではないようである。鷗外の他の翻訳作品から関連のありそうなものを拾うことが出来る。

・技手は手袋を嵌めた両手を、自動車の舵機に掛けて、真つ直ぐに馭者台に坐つて、発車の用意をして待つてゐる。（略）そのとたんに自動車は別荘の石壁に衝突して、二

人は死んだのである。「薔薇」、キイド、『諸国物語』所収)

・奴はゆらりと機関車の腹の上に飛び乗った。(略)ごろ音をさせて、列車は橋に掛かった。乗手は飛び降りた。無慚にも列車が下へ突き落されたのは、例の一サンチメートル幅の頭の釘を打ち付けた靴の踵で踏んだはずみであつたらうか。「汽車火事」、キイゼル、『十人十話』所収)

待ち受ける馭者(この場合は自動車を運転するのだが)と乗っていた者の死(「薔薇」の場合は別人と運転を代っている)。落下する乗り物とそれから飛ぶもの。これらも「蠅」との関わりを強く推測させるだろう。さらに次のような箇所も同じように挙げることが出来る。

・白い卓掛の上には、小さい毛の生えた足を延ばして、一匹の蜘蛛が下がつてゐる。…蚊のをばさんが一匹、火傷をした長い脚を机の上に引き摩つて行く。

・もうそこが崖だと云ふことを、わたくしは知つてゐたのですね。でも矢つ張馬車を留めようとはしないのです。

・馬が自分で真際になつた時曲がつたのです。「馬丁」、トルストイ、『諸国物語』所収)

小動物の微細な描写。落下こそしなかつたが、曲がる場所での馬車の危機。偶然の一致とは考えにくい。

一方で、農婦、母子、紳士などの存在は鷗外の翻訳作品な

どには見られず、それ以外に由来する可能性も想定したくなるが、横光の独自の組み込みではないかと思われる。いろいろな人々が乗り合わせることに紳士の存在については後に触れる「頭ならびに腹」とも関連するものであり、横光が温めていたモチーフの一環のように思われるのである。

さらに、饅頭が馭者の腹の中に入つて眠りを誘うことから馬車の墜落という悲劇が生じること、悲劇を眺めるのが人間ではなく蠅の目であることなど、人間の主体性が全く関与しないところで「物語」が進行するという構図こそは、参照した作品に依拠しない「蠅」の(新感覚派)の面目躍如ということであろう。「墜落」は、「真の恋愛をしてゐる」と自分が思っていた娘が自分を全面的に頼ろうとしたことに對して、「何もかも棄てる」ことにためらいを覚え、急に娘が疎ましくなることが、この作品の眼目と言える。「蠅」はあつさりとしてそれを切り捨てたのである。

「墜落」は、娘のことを嫌になつた男の気まぐれな愛心がスケッチ風に描かれたものである。「蠅」では同乗することになる旅客については、「墜落」では次のように記されている。

旅客が寝ぼけた顔をして、何事にも無頓着な様子で歩き廻つてゐる。赤帽が柱の周囲に、不性らしく立つてゐる。埃だらけのベンチの上に、包みや籠を置いて、それに寄り掛つて、不機嫌らしい顔をしてゐる下等社会の男女も

ある。

ここからは同じ車両に乗り合わせるという発想にはつながらない。横光が利用したと思われる鷗外作品の中心的なものはいずれもが、終末部へと引きずり込まれるような（悲劇）を誘引するようなものではない。そこに横光は（物語）を作り上げて、運命に翻弄される人々を描くのである。

二

横光はこれらの鷗外翻訳作品について、一括して視野に入れているとすれば、『鷗外全集刊行会による『鷗外全集』（大正十二年一月三十日から毎月刊、巻数は順不同）を目にしたかと思いたくなるが、先に挙げた作品を収録した巻の刊行年月から否定される。だとすれば、『諸国物語』や『十人十話』に依るかと思われる。後に鷗外の「有楽門」（『心の花』明治四十年一月に掲載）と横光「頭ならびに腹」の関係について触れるが、「有楽門」は単行本に収録されていないとされる。この作品が収められている全集の第五巻の発行は「頭ならびに腹」の発表後である。横光が『心の花』を読んだとしか考えようがない。

従来、新感覚派の代表的な人物の一人である横光と既成の大家である鷗外との間に影響関係があるなどとは想像もされなかつたであろう。文学史的常識に反することである。しかし、事実がそのことを明かしている以上、このことの意味を

考察をせざるを得ないであろう。そのように考えるならば、鷗外の死去の時期と横光の本格的な作家活動の開始の時期がほぼ重なることも念頭に置く必要がある。

ところで、「蠅」と鷗外翻訳作品との関係がなお、完璧には論証されてはいないのではないかという疑いの余地を残すとすれば、鷗外と横光の別の作品の対応についても考察してみることが、そうした疑念を払拭するのに有効であろう。

横光の「頭ならびに腹」（『文藝時代』大正十三年十月一日）と鷗外の「有楽門」も関連があると思われる。

「頭ならびに腹」の梗概を示しておこう。

列車が事故で先に進めなくなつた時、乗客が選択を迫られたのは、引き返して迂回するか、その場で開通を待つかであつた。一人二人が戻る方を選ぼうとしたときは反応しなかつた群衆が、腹の突き出た紳士がそちらを選ぶと殺到し、後には初めから乗り合わせていてずっと一人で歌を歌っていた小僧だけが残つてしまう。ところがすぐに開通することになり、一番先に着くことになる列車は一人だけ乗せて目的地に向かつた。

「有楽門」は次の通りである。

乗下車で混乱する市内電車の中で権能を発揮するのに満足そうな車掌。隙を見て乗り込もうとする小僧や、社内で乗り換え切符を要求する太つた腹の男。一人の職人が鎖を外して乗り込むといつせいに乗客が殺到する。その光景を面白そう

に見ていた四歳ばかりの幼児が電車の動き出すとともに歌を歌いだす

交通機関の混乱、腹の出た紳士（男）の存在、わずかなぎっかけで殺到する群衆。それと無関係に歌い続ける子供。ストリーには類似性というものがなく、混乱する人々の描写と一人の男の体格の描写が酷似していることが注目される。対応すると思われる個所を列挙する。

「頭ならびに腹」

・真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された。

・暫くすると、また一人じくじくと動き出した。だが、群衆の頭は依然として動かなかつた。そのとき、彼らの中に全身の感覚を張り詰めさせて今迄の様子を眺めてゐた肥大な一人の紳士が混つてゐた。彼の腹は巨万の富と一世の自信とを抱蔵してゐるかのごとく素晴らしく大きく前に突き出てゐて、一条の金の鎖が腹の下から祭壇の幢幡のやうに光つてゐた。

・すると、今迄静つてゐた群衆の頭は、俄に卓子をめがけて旋風のやうに揺らぎ出した。卓子が傾いた。「押すな！押すな！」無数の腕が曲つた林のやうに。尽くの頭は太つた腹に巻き込まれて盛り上つた。

・すると、空虚になつて停つてゐる急行列車の窓からひよつこりと鉢巻頭が現れた。それは一人取り残されたかの

子僧であつた。彼はいつの間にか静まり返つて閑々としてゐるプラットを見ると、

「おッ。」と云つた。しかし、彼は直ぐまた頭を振り出した。

「汽車は、出るでん出るえ、煙は、のん残るえ、残る煙はしやん癪の種 癪の種。」

歌は瓢々として続いて行つた。

・しかし、乗客の頭はただ一つ鉢巻の頭であつた。しかし、急行列車は烏合の乗合馬車のやうに停車してゐることは出来なかつた。車掌の笛は鳴り響いた。列車は目的地へ向つて空虚のまま全速力で馳け出した。

子僧は？ 意気揚々と窓枠を叩きながら。一人白と黒との眼玉を振り子のやうに振りながら。

「ア——梅よ、桜よ、牡丹よ、桃よ、さうは一人で持ち切れぬ ヨイヨイ。」

「有楽門」

・こたひは麦酒の広告に画ける如き腹したる男、後の口に立ち留まりて遽に乗換切符を求めたり。

・魔睡に陥りたるやうなりし客の過半は、忽ち夢の覺めたる如く、皆彼職人の後に跟きて乗りぬ。遅れたるは力を極めて先なるを圧せり。

・此童部前よりの混雑の状を、演劇を見る如く面白がりて見やり、固く睜きたる黒き目を輝かし居たるが、車の動

き始むると共に、声高く唱歌をうたひ出しつ。

「玉の宮居は丸の内。近き日比谷に集まれる 電車の道は十文字。」

車はこのかはゆき声を載せて、馬場先門の方へ走りぬ。

これらの類似から、横光が鷗外作品から材を得ていることは否定できないであろう。ここで微細なことだが注意しておきたいことがある。鷗外作品の「麦酒の広告に画ける如き腹したる男」は、必ずしも紳士であるわけではない。しかし、横光はそこから「巨万の富」へとつなげている。その関心のありようがうかがえよう。ただし、ビールの広告は樽がそのようなものとしてあり、腹の出た人間は広告にはなかったと思われるが、ポンチ絵などにはビール腹をした紳士の姿が描かれており、それを極端な金持ちとして取り込むことは必ずしも不自然なこととは言えない。「頭ならびに腹」では、他の乗客はこの紳士の後追いをするのだが、「有楽門」では、その対象はただの「職人」である。先にも触れたように、横光には紳士でなければならなかったものであろう。さらに、「有楽門」は市街電車が舞台であり、「頭ならびに腹」のような猛スピードの列車の記述はあり得ない（スピードのことでは、横光の「敵」にも「彼の心の方向へ馳ける汽車の速力は異常に彼を幸福にした」とある）。この「頭ならびに腹」の冒頭部の記述については、鷗外訳「父の讎」（マアデルング、「棕鳥通信」で言及、「蛙」所収）が対応する。

今乗つてゐる〇号列車は一時間幾キロメートルと云ふ速度を出して、耳に喧しい噪響を發しながら、或る時は、橋梁を渡つて登り、…忽然一の停車場の前を飛び過ぎる。駅長一人と取り残された旅人数人とは、幻の如くに過ぎる汽車を稍久しく見てゐる。

これが横光に取り込まれたとすると、鷗外翻訳作品では中軸ではない部分（たまたま同じ列車に乗り合わせた男が父の敵であつたことを少女が知る、というのが全体の趣向である）であるが、小説の冒頭部にあることが共通しており、よりいっそう列車の速度を高めるような印象を強めるなど、交通の近代化を前景化していると言えよう。そのうえで、「忽然一の停車場の前を飛び過ぎる。駅長一人と取り残された旅人数人とは、…」という常識的な描写に換えて「沿線の小駅は石のやうに黙殺された」という、発表当時話題となつた（新感覚派）的な記述を持ち込んだのだと言えよう。

さらに、横光の両作品の共通性も視野に入れることが出来るだろう。交通手段という場。真昼（夏）という時間設定。金を儲けた紳士の役割（「蠅」では「馬車の中では、田舎紳士の饒舌が、早くも人々を五年以来の知己にした。」とある）。「鳥合の乗合馬車」に乗り合わせた集団。そうした場の設定の上に、自らの意志で状況判断をすることのできない民衆が、饅頭で腹が満ちた一人の馭者が居眠りをするというような、卑俗で些細な出来事によつて翻弄されてしまう。あるいは情

報がもたらされないままに、一人の紳士の動きに雷同する。いわば、「頭ならびに腹」は「蠅」の変奏であるとも言えよう。そのようなモチーフに見合ったものを見出し、先に述べたように、鷗外作品（鷗外の創作と翻訳）の職人の振舞への追隨としてあったものを紳士の追隨へと変更させて用いたということになる。また、このように考えると、「蠅」執筆の時点で「有楽門」も視野に入っていたとも考えられる。交通手段としての電車や列車は近代小説に取り込まれることは多い。鷗外自身にも他に「電車の窓」もあり、永井荷風の「深川の唄」は市内電車に殺到する庶民の姿を傍観者の視点から、からかうように捉えたものとして「有楽門」と類似している。志賀直哉の「網走まで」・「出来事」・「正義派」などもあり、漱石「門」には休日の電車のゆとりのある様子が描かれる。交通の近代化なるものが市井の人々にどのような状況をもたらすのか、電車や列車は格好の材料であった。

ところで、「頭ならびに腹」の子どもが唄う歌の一つは、「蒸気や出て行く、烟がのこる、のこる烟が、ヤンサイコノ、癪の種ナア、ヤレ癪の種、残る烟がヤンサイコノ、癪の種ナア、アイヤサカイヤカサ。」（能登国 盆踊歌（鳳至郡六水村）、『諸国童謡大全』、あるいは端唄「茄子と南瓜」）に由来している。残される側の「恨み」を趣旨とするものが、見捨てて行った側の「悲劇」に反転させられている。「梅よ、桜よ……」の文句は、「文句入都々逸（明治二十三年八月出版。

金寿堂版。蒼々堂縁窓撰。）」に収録されているものと同じ。これについては、「此年に生るゝ人はちえさいかくありといへども余り諸芸をならふ事多くしてとげがたしもつとも財宝にえんあるべし」との添え書きがある。横光がこのことを知っていたかどうかはわからないが、「ちえさいかく」に走って、結局憂き目を見ることでは「頭ならびに腹」に適應すると言えよう。横光が俗謡を取り込んでいたのに対して、「有楽門」の歌は『東京地理教育 電車唱歌』（明治38年刊）のものである。両者の関心の向くところの差異がここから窺えよう。

おわりに

この他にも、鷗外の翻訳作品については『諸国物語』の「橋の下」や「猿」と芥川の関連は指摘されている。また、それ以外にも「復讐」、「アンドレアス・タアマイエルが遺書」なども漱石の「心」に取り込まれていることを指摘することができる（一）。

太宰は鷗外の名前に言及することが少なくないが、彼の場合は、その「女の決闘」の中で自らが目にした鷗外の翻訳作品「女の決闘」は小島政二郎による全集の翻訳篇十六巻と明示している。

このような例からも横光が鷗外の翻訳を含めた作品に関心をもつことは珍しくないのである。

なお、「横光利一の初期作品における志賀直哉の影響をめぐって」という論考⁽²⁾もあり、「マルクスの審判」と「范の犯罪」、「笑はれた子」と「清兵衛と瓢箪」の関連などは間違っているまい。横光の大家作品の摂取は異例ではないと思われる。

注

- (1) 拙稿「裏側から読む「心」」(『語文』89輯)
(2) C・J・プロケット。『第一次近代文学 研究と資料 三』に所収。

※ なお、脱稿の後に横光の「美しき裏切」が鷗外の翻訳「悪因縁」と同じくクライストの同一作品を訳したものであることに気が付

いた。横光も原作を訳したのか、あるいは鷗外作品を圧縮したものか今は定かでないが、両者の関係の深さを補強するものと言えよう。

また横光作品は河出書房新社の『定本 横光利一全集』、鷗外作品は岩波書店の『鷗外全集』より引用した。

【追記】本論文は二〇〇八年度科学研究費基盤研究B「森鷗外『棕鳥通信』における西欧文化の受容・伝播の総合的研究」(課題番号二〇三二〇〇三七、代表・金子幸代、富山大学)の最終報告書に「鷗外『棕鳥通信』で言及した作者の翻訳作品の他者利用について」として掲載した論文を改題し、加筆修正したものである。

(いずはらたかとし／本学大学院教授)